

## 平成15年の穂いもち多発生 (5)種子の保菌率

古川農業試験場

### 1 取り上げた理由

穂いもちの発生は収量のみならず、種子として翌年の稲作への影響も大きい。そこで、籾のいもち病保菌率について調査した結果を翌年の育苗管理のための参考資料とする。

### 2 参考資料

- 1) 平成15年は穂いもち多発の影響で、籾の保菌率は平年に比べ高く、ほ場での発生量が低い場合でも、保菌率の高い傾向が認められる(図1)。
- 2) 玄米へのいもち病菌の侵入は苗いもちの重要な伝染源となり、通常保菌籾の2割程度とされているが、今年の保菌玄米率は通常年に比較し高い(図1, 2)。
- 3) 高度汚染籾の場合、塩水選を実施しても、保菌籾を完全には取り除けない(図3)。

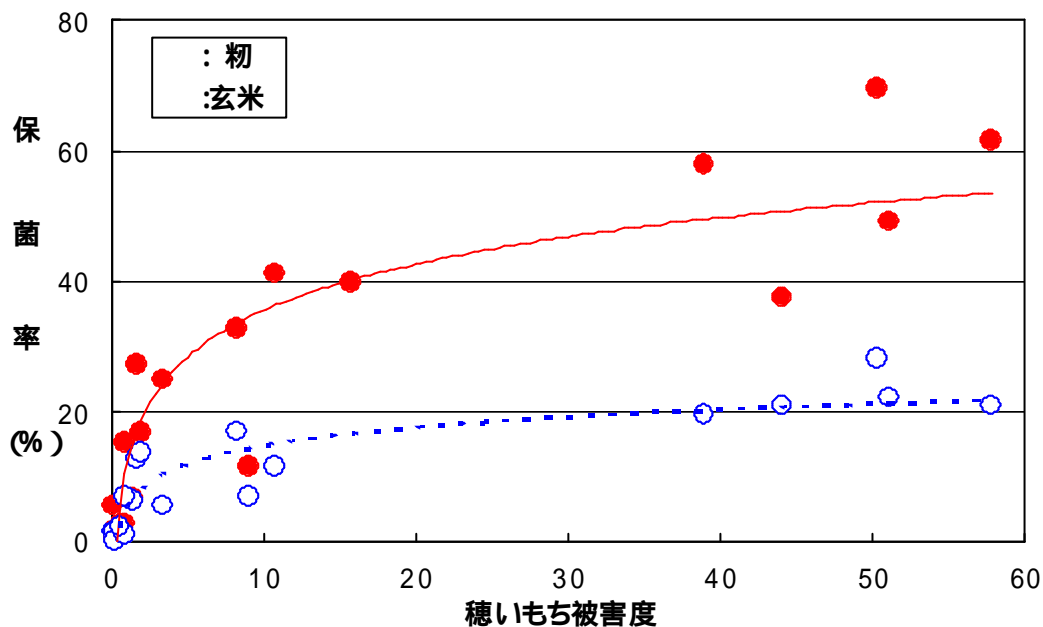


図1 ほ場における穂いもち被害度と籾、玄米での保菌率の関係

品種 : ひとめぼれ (古川農業試験場場内ほ場) 塩水選(1.13)実施済み

### 3 利活用の留意点

- 1) 供試種子は、試験場内における穂いもち発病程度の異なるほ場から採集した籾である。
- 2) 保菌率は平年に比べ高いと予想されることから、苗いもち、苗の葉いもち対策として、育苗作業では下記の点に留意する。
  - a 多発ほ場や多発ほ場周辺からは採種しない。また、種子消毒を規定通り実施する。
  - b 浸種は水温10～15度で品種毎の積算温度を目途に十分に実施する。
  - c 厚播にならないようにする。
  - d 覆土は籾が露出しないよう完全に実施する。
  - e 移植適期に達した苗は直ちに移植する。また、育苗ハウス内で葉いもち発生を認めたら直ちに薬剤を散布する。
  - f 箱施用剤の播種時処理は、苗いもち由来の葉いもちに対し効果がある。

(問い合わせ先: 古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

平成16年4月作成

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

農作物有害動植物発生予察事業：平成15年

2) 参考データ

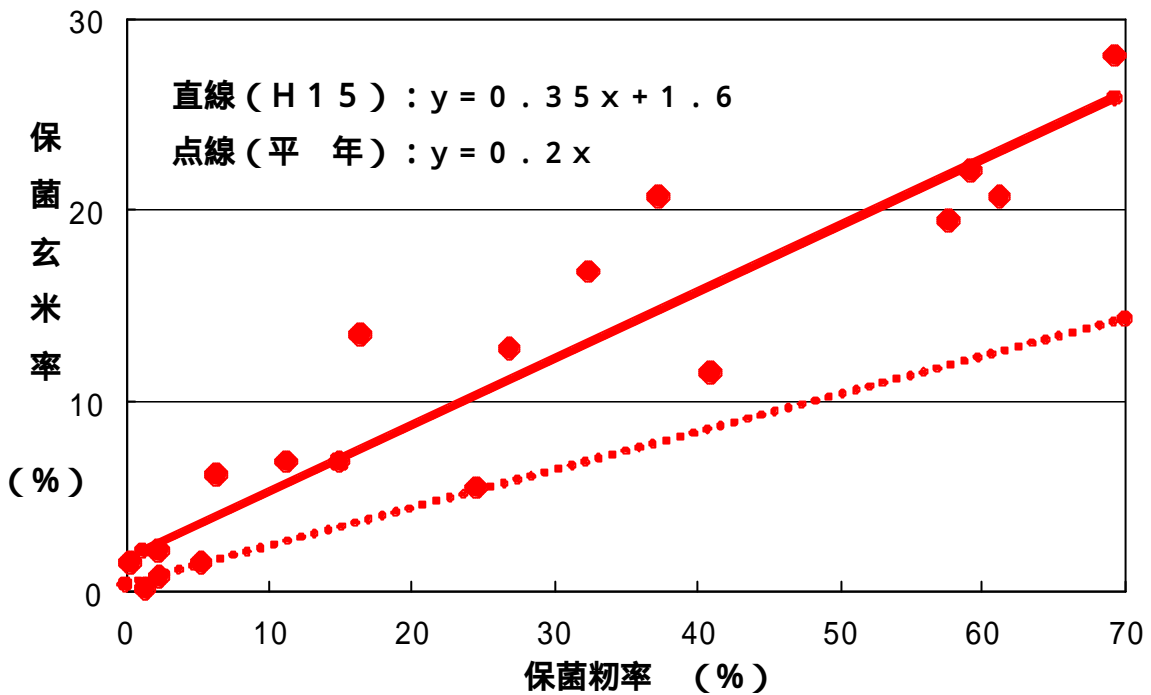


図2 籾での保菌状況と玄米での保菌状況(ひとめぼれ)

品種 :ひとめぼれ(古川農業試験場場内ほ場) 塩水選(1.13)実施済み

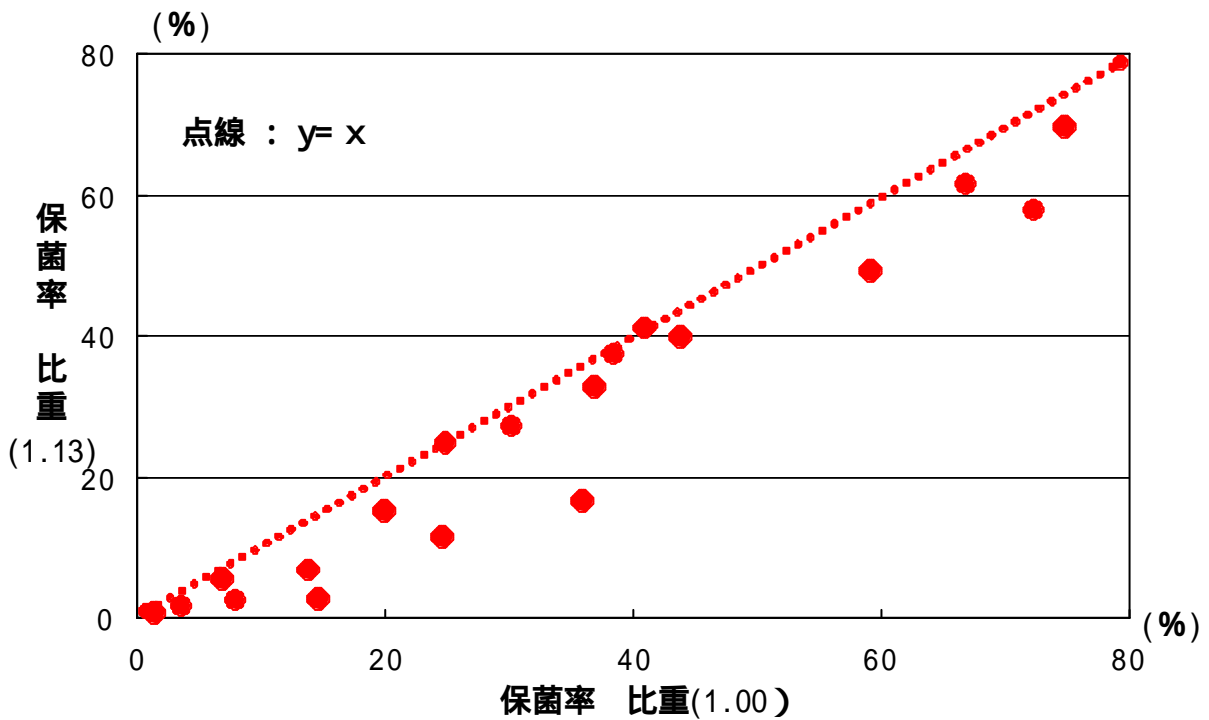


図3 塩水選後のいもち病罹病籾の保菌率

3) 発表論文等

特になし